祈りの人たち

最近、神棚や仏壇のない家は珍しくない。「祈る」という行為が少なくなったことは間違いない。

聖書には、人間は神の似姿として作られたとあり、人間だけができる「祈る」という行為をもっと大切にしなければ、人間でなくなるのではないかとさえ思う。

巡礼の旅とは祈りの旅とも言える。日常生活の中では、なかなかしがらみから解放されにくい。そこで聖なる地を目指して祈りの旅をする。

しかし、同じ祈りでも、生涯、同じ空間の中で祈りと労働の生活を送っている人たちもいるのだ。

カトリック教会にはたくさんの修道会がある。サビエルも、その一つ、イエズス会の司祭であった。

司祭や修道女は結婚することもなく自分を神に奉献し、教会、学校、病院、老人ホームなどで人々への奉仕の生活を送る。

そんな一般修道会とは異なり、生涯、世俗を離れ、修道院の囲いの中で祈りと労働の生活を送る修道会を〝観想修道会〟と呼ぶ。日本で比較的知られているのが、北海道のトラピスト修道院である。

その観想修道会が山口県にもある。大きなパラボラアンテナで有名な山口市仁保のインテルサットのすぐ近くにある女子カルメル会修道院がそれで、昭和五十四年に誕生した。

彼女たちはカルメリットと呼ばれ、現在はノビス（志願者）二人を含め十一人の共同体である。

祈りの歌を歌うカルメリット（白いベールがノビス）

私はこの修道会が大好きである。理由は極めて簡単。私には到底真似できない生き方であり、あこがれの恋人のような存在である。

言うのは簡単だが、自分の生涯のすべてを神に委ね、神に賛美と感謝を捧げ、祈りと労働の生活を送る。

沈黙が原則で、私語が許されるのは昼食後と夕食後の四十五分の休憩の時だけ。面会室で会うと彼女たちはいつも笑顔を絶やさない。しかし毎日の単調な生活の繰り返しの中で、自分と、そして神と向かい合う大変な生活だと私には思える。

そんなカルメリットに魅せられ、在職中「祈りの人たち・十五人のカルメリット」というラジオドキュメンタリー番組を制作した。

私の強い要望で取材が実現したが、素晴らしい素材であった。私の力不足でコンクールでは最優秀賞は取れなかったが、今も横浜市の「放送ライブラリー」に保存され、公開されているのは、私の数少ない誇りの一つである。

昨年の退任後、毎朝早ミサに行っているが、一、二週間に一度は朝五時に起き、一時間かけてこちらのミサに参加している。

彼女たちは必ず天国に入れるだろう。私のような罪人は入り口の検問で問い質されるであろうが、その時「私たちの知り合いです」と口添えして下さるのを期待し、細々と差し入れをしている。彼女たちの生活は本当に質素なのである。

シスターたちは生活の糧を得るためにフェルトのスリッパを作って売っておられ、我が家でも預かって希望する人に販売している。

私たちの結婚生活の前半は、激しい労働争議の中、それを酒でごまかすアルコール依存症気味の私と、神に助けを求める神依存症気味の妻とのせめぎ合いで、離婚を口にし「キリストか私かどちらを選ぶか」と迫った。もちろん賢い妻は私を選んだ。

それにしても神にすべてを委ねるカルメリットこそ、聖地へ巡礼したいことであろう。

私のような信仰薄き者が聖地へ旅する。せめて現地から絵はがきをなるべくたくさん出そうと心に誓い、旅立ったのである。

（前山口放送取締役ラジオ局長）

カルメル会のスリッパ